

ヒュームの労働認識の特徴と意義¹⁾

田 中 秀 夫

I 快としての労働の発見

人間の本質としての労働についての哲学的、思想（史）的考察は19世紀にヘーゲルやマルクスによって熱心に取り組みられたが、20世紀にはヴェブレン、ホイジンハ、レヴィ＝ストロース、そしてアレントなどによってさらに深められた。

ヘーゲルとマルクスは労働を人間の本質の対象化行為として、したがって自己実現として把握した。しかしながら、マルクスは、そのような労働は資本主義社会では疎外されてしまい、労働者の自己喪失になるという分析を提出した。そのマルクスはスミス、リカードを継承し労働価値説を首尾一貫した理論として構築したことに自らの理論の最高の成果を見ていた。マルクスは受苦としての労働という言葉を用いて、本質が疎外された資本主義社会における労働を捉えた。そこには労働は人間の本質なのだから喜びにならなければならないという思想がこめられていた。

マルクスが喜びとしての労働という思想をどこから取り出したのかは特定が困難であるが、マルクスに先立って、ヒュームに喜びとしての労働という観念が存在している。その点をいち早く指摘したのは、シカゴ大学のロートワインであった。

すなわち、ロートワインは、すでに半世紀前になるが、ヒュームの経済思想

1) 本稿は、国際ヒューム会議のパネル報告（2004年8月3日、慶應義塾大学）のために書かれたものの邦語版で、加筆修正を加えたものである。骨子に大きな変更はない。

を論じたとき、ヒュームが人間的な喜びの源泉として、労働、あるいは勤労を高く評価したことに注意を向け、その理由をヒュームの人間本性理解、すなわち快楽主義的な経済心理学に求めた²⁾。もちろん、その労働は、近代の商業社会（ヒュームの用語法では「文明社会」civilized society）の労働についての限定された観察であって、歴史貫通的な一般的観察とみなすことはできない。

ロートワインの説はコーツ（Coats [1958]）と田中敏弘によって踏襲された（田中 [1971]）が、最近、ベリー（Berry [1994] p. 146）と坂本が、ヒューム文明社会認識の特長として知識・労働・人間性の密接不可分性、三位一体性を強調している（坂本 [1995] 299-300ページ）のも、ロートワインによる解釈のいっそうの展開と見なすことができるであろう。今ではヒュームに次の文章があることはよく知られている。

“Industry, knowledge, and humanity, are linked together by an indissoluble chain, and are found, from experience as well as reason, to be peculiar to the more polished, and... the more luxurious ages.” (Hume [1994] p. 107) 「勤労と知識と人間性は、解き離しがたい鎖でつなぎあわされており、それらはいっそう磨きあげられた、……いっそう奢侈的な時代に特有であることは、理性とともに経験からもわかる。」（田中敏弘訳、22ページ）

確かに、ヒュームの経済論において、奴隷労働のような強制労働は別として、文明社会における自由な労働、勤労は肯定的にのみ登場し、墮落や疎外の源泉とは見られていない。それは著しい特徴である。けれども、事実問題として、商業社会における労働は楽しい活動であることもあれば、苦役以外のなにものでもないこともある。それは、その時々々の労働の種類と質によってまた経済的環境によっても異なるであろう。概して、遊戯的・娯乐的・創造的の要素が勝るとき、労働は楽しいものとなり、労働というより、自己実現活動に接近する。実際、スミスは、狩猟と漁労は商業社会の上流階級においては労働ではなく娯楽、スポーツとして行なわれるという事実に言及した（Smith [1976] Vol. 1,

2) Rotwein [1955] p. xxxvi, xciv.

p. 117)。しかし、このような労働の喜びは、歴史を通して、例外的ではないにしても、主流とはならなかった。多くの場合、労働の楽しさはそれ以上の苦しさによって打ち消された。産業革命の結果、19世紀には本格的な資本主義的大工場が形成され、そこで雇われた労働者は、賃金奴隷と呼ばれるような長時間の低賃金労働を強いられるといった境遇に置かれた。この間に実質賃金の大幅な上昇があったとしても³⁾、マルクスが「労働の疎外」の概念によって資本主義を否定したのには、根拠があった。

なぜ、ヒュームは快としての労働という概念を持ちえたのか、その理由をロートワインのように、ヒュームの人間本性の心理分析にのみ求めるのでは不十分であろう。またヒュームは労働と分業のマイナス面の分析をなぜ行なわなかったのだろうか。これはこれまで問われることのなかった問いである。本稿では、ヒュームの言説と歴史的・思想史的コンテクストに即して、この問題をいっそう掘り下げて追究してみよう。

II ルネサンス的モーメントと道徳哲学

労働は古典哲学においても奴隷の役目とされて蔑視されたが、キリスト教の伝統では原罪労働観が有力な思想であった。ルターやカルヴァンは召命(Beruf, calling)としての職業労働、勤労を説いたが、それは下級の職業労働をも価値として認識する大きな一歩であった。しかし、職業労働にそれ自体としての喜びを見出すという思想はルターにも存在せず、まして感覚の満足を退けたカルヴァンには認めることのできないものであった。

他方、イタリアに始まるルネサンスは技芸の地位を高めた。以来、熟練職人の工房は芸術性の高い産物の製作所として評価され、熟練労働の価値を高めた。ルネサンスの宮廷文化に始まり、ヨーロッパの各地に次第に広まって行った洗練と文明化の歴史は、今ではアリエスなどの研究によって光が当てられている

3) ニールによれば (Neale [1975] p. 173), 1850年のブリテンでの実質賃金は1801-1804年のおよそ2倍であった。この点はウェスト (West [1996] p. 33) に負う。

し、またルネサンスから啓蒙時代にいたる時代の科学技術史などは龐大な研究があるけれども、その洗練と文明化を支えた製作者側の歴史、とりわけ熟練労働の歴史は必ずしもよく知られていないように思われる。

おそらく独立した職人の労働に快を見いだす思想は、芸術活動の喜びを認める認識の延長線上に登場したものと推察される。そうしたルネサンス以来の世俗的な芸術と技術の活動の延長線上に、ヒュームの快としての労働の概念が成立したのではないだろうか。熟練職人のギルドを保護する徒弟条例を厳しく批判したスミス⁴⁾には、ルネサンス的芸術的工房の労働を擁護する議論は希薄に思われるが、ヒュームには明確なギルド批判はない。ヒュームの経済思想の形成におけるルネサンス的モーメントは相当に重要に思われる。

ヒュームの経済分析が『道徳・政治論集』に収められた一種の推測的歴史のエッセイ「市民的自由について」(Of Civil Liberty)や「学問技芸の興隆と進歩について」(Of the rise and progress of the arts and sciences)に遡ることは、今日では広く認められているであろう。

ヒュームは述べている。「商業は、自由な政体以外においては、決して繁栄することができぬ、とは、今や定説となった見解です。……もしわれわれが商業の中心の移動過程を、テュロス、アテナイ、シラクサ、カルタゴ、ヴェネティア、フィレンツェ、ジェノヴァ、アントワープ、オランダ、イングランド、等々とたどってくるならば、われわれはつねに、商業は自由な政体を自らの落着先と定めていることに気づかされることでしょう。」(Hume [1994] p. 54)
「多数の独立する隣接国家が商業と政策で結合されることほど、洗練と学問の興隆に好都合なことはない。」(Hume [1994] p. 64)

先の引用文が、商業の発展と地理的な変遷をルネサンス・イタリアからオランダを経て、ブリテンへと辿っているのは、偶然ではない。それは学問・技芸の発展とも関連があり、学問技芸の拠点は、独立した熟練職人と専門職としての市民の生活圏であり、粗野な産業と洗練された奢侈産業とをあわせもつ都市

4) Smith [1976] vol. 1, pp. 135-159. 水田訳『国富論』(1), 209-251ページを参照。

であった。

これは商業—経済活動—の繁栄を大雑把に歴史的に鳥瞰したものにすぎず、そこから引き出されている一般的な原理は、自由な政体において商業は繁栄するという、また商業の繁栄は学問技芸の発展にも相関的であるということにとどまる。この一般的な原理の限定としてフランスにおける君主政が商業の発展を許容できる開明的な類型であるという分析も登場しているが、『道徳政治論集』では、一般的な理論としては、政治的な自由→経済活動→文化活動の連関が描かれているに過ぎない。商業、すなわち経済活動がいかにして繁栄するかについての内在的論理——経済発展論、経済成長論——の析出と構築は、その後の課題である。

外国貿易に刺激されて始まる商業がいつその繁栄を遂げるプロセスを地域的な農工分業の深化として理論化することは『政治論集』が遂行している。

『道徳政治論集』から『政治論集』へのヒュームの認識の発展は、政治認識のみならず、経済認識においてもきわめて大きい。スミスは『国富論』第三編で、ローマ帝国衰亡後のヨーロッパの経済史を跡づけたとき、ヒュームの試論を拡充した議論をした。スミスが注目したゲルマン封建社会の内部での農民の隷従から独立・解放に向かう歴史は、『道徳政治論集』にはないけれども、『政治論集』全体と『イングランド史』(1754-1762年)に読み取ることは可能である⁵⁾。

今では、ヒューム経済思想の形成を『人間本性論』に関連づけて理解する試みも生まれており、コンヴェンション＝慣習的制度の発展という『人間本性論』の社会形成論が、正義論だけでなく、経済論の前提にもなっているという

5) したがって、スミスは「商業と製造業は、農村の住民のあいだに、秩序とよき統治を、またそれとともに個人の自由と安全を、次第にもたらした」ことを指摘したときに、ヒュームは、商業と製造業の効果のなかでも、もっとも重要なものであったこの点に注意をした唯一の著作家であると付言した。Smith [1976] vol. 1, p. 412. 水田訳『国富論』(2), 235ページ。ブリュアはこの関連に注目するとともに、ヒュームと『国富論』のスミスの違いをスミスが経済成長の要として貯蓄＝節約を強調している点にあることを指摘している。Brewer [1998] p. 79. しかし、私見では、ヒュームは資本蓄積の明確な概念を持たないけれども、『政治論集』に登場する「労働の蓄え」という概念には、資本蓄積概念の萌芽が見られるのであって、ブリュアの解釈を超えて、さらにヒュームとスミスの継承関係と差異を厳密に明確化することが必要であろう。

分析が出されるようになっている⁶⁾。それも当然の解釈である。ヒュームは人間・道徳哲学の書としての『人間本性論』において社会諸科学の基礎となる人間の科学を確立し、その基礎の上に社会諸科学＝道徳の学を形成すると展望していたのだからである。

したがって、快としての労働の概念は当然、人間の学を展開した『人間本性論』第1、2部において視野にあった概念ではなかったかと推察されるが、しかし、労働そのものの快(苦)は原生的印象(primary impression)に属すものなので、ヒュームが明示的に二次的印象(secondary impression)に考察対象を限定した『人間本性論』には登場しない。また実際に「労働」の概念が登場するのは、第3部において所有権の源泉としてのみである。

III 労働＝快樂説と労働価値説

フォーブズ(Forbes [1975])からホーコンセン(Haakonssen [1981], [1996]), バックル(Buckle [1991])にいたる自然法学の研究が明らかにしてきたように、ヒュームは道徳哲学者としての資格を立派に備えている。自然法思想の継承をベースに社会の諸問題を体系的に考察したのが、ハチスンに始まるスコットランド啓蒙の道徳哲学の伝統——それはカーマイケルを介してプーフンドルフに遡る——であったとすれば、ヒュームの社会の学問も、自然法をベースにした道徳哲学体系であった。ヒュームが体系的な道徳哲学を名乗った著作を残さなかったのは、スコットランドの大学の道徳哲学教授になりそこなったからに過ぎないと言えるかもしれない。

したがって、ヒュームの経済論には道徳哲学的色彩が伺われるのは不思議ではないし、またヒュームの労働論は、専門的・技術的な労働分析にとどまらない(専門的・技術的な分析用具としてヒュームが持ちえたものは多くない)道徳哲学的、包括的な考察をもつ点に特徴がある。そのような特徴の一つが商業、勤労、技術の評価であり、さらには労働という活動のもたらす快活さという分

6) 例えば、Wennerlind [2001]。

析である。

“The greatness of a state, and the happiness of its subjects, how independent soever they may be supposed in some respects, are commonly allowed to be inseparable with regard to commerce“ (Hume [1994] p. 94) 「国家の偉大さとその臣民の幸福とは、ほかの点ではどれほど相互に独立したものと考えられるとしても、こと商業に関しては不可分であると一般に認められている。」(田中敏弘訳, 5 ページ)

“According to the most natural course of things, industry and arts and trade encrease the power of the sovereign as well as the happiness of the subjects; and that policy is violent, which aggrandizes the public by the poverty of individuals.” (*Ibid.*, p. 98) 「事物の最も自然な成り行きによれば、産業活動と技術と商業は、臣民の幸福とともに主権者の力をも増大させる。だから、個人の貧困によって国家を強人にする政策は乱暴である。」(田中敏弘訳, 10 ページ)

“When a nation abounds in manufactures and mechanic arts, the proprietors of land, as well as the farmers, study agriculture as a science, and redouble their industry and attention. The superfluity, which arises from their labour, is not lost; but is exchanged with manufacturers for those commodities, which men’s luxury now makes them covet. By this means, land furnishes a great deal more of the necessaries of life, than what suffices for those who cultivate it. In times of peace and tranquility, this superfluity goes to the maintenance of manufacturers, and the improvers of liberal arts.” (*Ibid.*, p. 99) 「ある国民が製造業や機械的技術に富むときには、農民とともに土地の所有者も、農業を科学として研究し、自らの勤労と注意とを倍化する。かれらの労働から生ずる剰余生産物は失われず、製造業者との交換によって、いまや人びとの奢侈がかれらに渴望させるもろもろの財貨を得させる。このようにして、土地はその耕作者の必要を満たすよりもはるかに多量の生活必需品を供給する。

平和で平穏な時代には、この剰余生産物は、製造業者や自由学芸の改善者を維持することに向かうのである。」(田中敏弘訳, 11ページ)

このようにヒュームが近代社会を豊かな幸福な社会として把握できた理由は、農工分業が深く進んだ社会として把握できたことに求めてよい。近隣の農工分業によって相互に安定的に需給を拡大できるというメカニズムにヒュームは注目した。

“In times when industry and the arts flourish, men are kept in perpetual occupation, and enjoy, as their reward, the occupation itself, as well as those pleasures which are the fruit of their labour. The mind acquires new vigour; enlarges its powers and faculties...” (*Ibid.*, p. 106) 「産業活動と諸技術が栄えている時代には、人びとは絶えず仕事に従事し、労働の果実である快樂だけでなく、仕事したいをもその報酬として享受する。精神は新しい活力を獲得し、その力と能力を増大する。」(田中敏弘訳, 21ページ)

このような農工分業による繁栄という図式は、国際分業による相互需要と競争による発展という図式へと拡大される。

“The encrease of riches and commerce in one nation, instead of hurting, commonly promotes the riches and commerce of all its neighbours, and that state can scarcely carry its trade and industry very far, where all the surrounding states are buried in ignorance, sloth, and barbarism.” (*Ibid.*, p. 150)

「ある国民の富と商業との増大は、その近隣の諸国民すべての富と商業とを損なわないどころか、それらを促進するのが普通であり、一方、まわりの国がすべて無知と怠惰と野蛮の状態に沈み込んでいるときには、一国がその商工業を大いに進歩させることはまずできない。」(田中敏弘訳, 83ページ)

アレント (Arendt [1958]) は近代思想家の全般的傾向としての労働価値説を退け、生命維持の手段となった近代の労働を、活動、仕事の下位においたが、ヒュームは近代の労働にアレントが活動に帰していた属性、すなわち自己実現を見いだしたと言えるかもしれない。ではヒュームは労働価値説を説いていた

のだろうか。

労働を人間的活動として高く評価することは、直ちに、労働価値説を意味するわけではないが、通常は両者には関連があるであろう。ロックは労働を所有＝財産の源泉として高く評価し、労働価値説の父の1人となった。ベティもまた富の源泉として労働を高く評価し、労働価値説を説いた。彼らは重商主義者の共通の傾向として労働を義務とみなした。ロックにもベティにも労働＝快楽説はない。彼らの立場は労働＝骨折り説であり、そのようなものとして労働価値説なのである。人間を神の道具と見なすプロテスタントは、そもそも、その教義からして勤労に快楽を見だしてはならなかったであろう。また労働がそれ自体として快楽であれば、ことさら報酬を請求する理由もなくなるであろう。また快としての労働は、高賃金である必要はないとも言えよう。労働が報酬を要求できるのは、それが希少価値を持ち、苦痛であるからと理解することが合理的であろう。もちろん労働によって生計を維持しなければならない限り、労働に報酬が発生しなければならない。快としての労働であっても、労働生産物が売れることが報酬をもたらすであろう。

けれども、労働を人間的活動として高く評価することは、もっと多くのニュアンスを持つものであり、そこに自己実現が含まれていることを排除するものではないだろう。自己実現が能力に関わる限り、自己実現を含む労働に高賃金が払われてはいけないという理由はない。

ヒュームは労働を所有の源泉の一因として認めている。ヒュームは投下労働価値説を必ずしも明確に定式化していないが、しかし、少なくとも労働価値説の明確な否定はない。「世界のあらゆるものは労働によって購買される」とヒュームは明言している (Hume [1994] p. 99)。これは緩やかな意味で、労働価値説と呼ぶことができるかもしれない。

けれども、ヒュームの労働概念に注意を向けなければならないのは、ヒュームが緩やかな意味での労働価値説を採用していたからではない。それは、すでに述べたように、当時の経済論者が押しなべて労働を労苦として、さらには必

要悪として捉えていたのに比べて、例外的な労働＝快樂説を持っていることがヒュームの際立った特徴の一つだからである。スミスも労働や職業の快苦を問題にしたが、その快を報酬に求める傾向が強く、労働＝骨折りに立っていた。スミスは分業の副産物として発明発見のような創造性を認めていたとしても、そのことから労働＝快樂説を引き出すことはできない。

IV 労働疎外論の欠如について

ではなぜヒュームは労働の快樂説を説くだけで、苦役労働に注目しなかったのであろうか。ヒュームは、なぜ労働の否定的側面に注意しなかったのであろうか。その理由としてどのような理由が考えられるだろうか。

第一に、ヒュームは、眼前の商業社会を商工業者と農業者からなる社会として把握している。すなわち、ヒュームは、彼らを封建的依存関係から解放され、市場に支えられて、独立して自前で仕事をする独立生産者という側面をもった商工業者および農民として、したがって勤労するもの＝労働者として描写している⁷⁾。そのような独立して労働＝仕事する商工業者と独立自営農民の構成する社会として把握する社会理解はスミスの商業社会の概念と重なる。ヒュームにおいても、階級区分はすでに存在する。けれども、その階級分割はスミスの『国富論』のそれほども進んではいない。諸階級が存在する文明社会であるけれども、働くという活動において、彼らは独立して活動を営んでおり、独立した経済人なのである。そのような意味で、ヒュームは労働を、彼ら諸階級の、働くという共通の営みとして、その共通性において把握できた⁸⁾。

第二に、富と自由をもたらし原因でもある学問・技芸の発展と商業のポテンシャルに注目するヒュームにとっては、商業社会の積極面を押し出す必要が

7) 参照、田中 [1971] 49ページ。「ヒューム・モデルでは、農民も商工業者も独立生産者として登場し、かれらの間の交換を通して譲与生産物が増大してゆく過程がえがかれている。この意味においてみる限り、ヒュームの近代社会のモデルは独立生産者的世界であるといえる。」

8) 著者は独立生産者という職業のあり方を現代的可能性のあるもの、復権すべきものと考えている。

あった。自由な社会の擁護者であるヒュームは、とりわけ、古代人口優位説をとるモンテスキューに支持された、同郷の有力な古代社会賛美者のロバート・ウォレスを論駁する必要があった⁹⁾し、また絶対主義への愛着を持ち続けている反動勢力と対決する必要もあった。したがって、古代の奴隷労働に依存する原理ではなく、また封建的な隷従労働でもなく、自由な勤労という近代社会の原理、近代の自由な労働の価値、喜び、人間性をいっそう強調する必要があった。

第三に、ヒュームにとっては、文明の否定面の分析は副次的なことであったと思われる。一般的な自己喪失としての疎外はヒュームの個人的な体験のなかに見いだせるかもしれないが、それは別として、ここでの疎外の概念は、分業労働による人間性の喪失、公共性の崩壊¹⁰⁾ という意味での「疎外」の概念のことである。それはルソーに見いだせるとしても、ヒュームに見いだすことはできない。ヒュームは事実認識として分業を知らなかったわけではない。また骨折労働が社会に存在することをヒュームが知らなかったとは思えないが、分業＝専門化がもたらす弊害には注目しなかった。なぜなら、学問・技芸の発展——それは職業分化、分業、専門化を含意する——はルソーにとっては疎外の原因であったかもしれないが、ヒュームにとっては進歩の原動力であったからである。ルソーの著作がスミスと同じく、ヒュームにも、文明の否定面の分析を教えた可能性は考え得るが、しかし、そうだとしても、それはヒュームが自らの思想と著作を基本的に形成し終わった後のことに過ぎない。

第四に、産業革命の未展開ということが指摘できるのではないと思われる。スミスは分業を二面的なものとして分析したが、ヒュームには今述べたように、分業の二面性分析はない。スミスの弟子のミラーに分業の二面性把握があるの

9) ヒュームの古代社会批判、ウォレス批判を共和主義批判と単純に受け取るべきではない。それは歴史意識を欠いた短絡であり、またヒュームの社会思想の複雑な諸コンテクストを無視する単純な誤解である。

10) ヘーゲルやマルクスに先立って、公共的存在としての市民の公共性の喪失という意味で、疎外の概念が生まれたのは、共和主義、シヴィック・ヒューマニズムにおいてであることは、ホーコックの研究が教えた。Pocock [1975]。

は当然であろう。

“It is hardly possible that these mechanics should acquire expensive information or intelligence. In proportion as the operation which they perform is narrow, it will supply them few ideas; and according as the necessity of obtaining a livelihood obliges them to double their industry, they have the less opportunities or leisure to procure the means of observation, or to find topics of reflection from other quarters.”¹¹⁾ 「こうした職人が広い知識と知性を得ることはほとんど可能ではない。彼らが遂行する作業の少なさに応じて、彼らに与えられる観念は少なくなる。そして生計を営む必要が彼らの勤労を二倍にすることを余儀なくさせるにつれて、他の分野から、観察の手段を得たり、考える主題を見出したりする機会あるいは余暇がいっそう少なくなる。」

しかし、ミラーはスミスと違って、投下労働価値説をとらなかった。ミラーは機械の価値形成を認めたからである。ヒューム、スミス、ミラーはそれぞれ12歳ずつ違っている。ヒュームとミラーの年齢差は24歳である。この間に大ブリテン社会はどの程度変容したのであろうか。最大の変化は産業革命の開始をミラーは知りえていたということにある。ヒュームには産業革命の認識は皆無である。スミスの場合は、微妙であって、研究者の間でも見解が分かれる¹²⁾。

第五に、ヒュームも欲望を手放して賛美したわけではない。したがって、その点では、ヒュームは先輩のケイムズに接近するが、それは疎外の概念への接近とはいえない。ルソーの理解者であることを自認していたケイムズは、商業

11) Millar [1803] IV, p. 145. ミラーはこう続けている。“As their employment requires constant attention to an object which can afford no variety of occupation to their minds, they are apt to acquire an habitual vacancy of thought, unenlivened by any prospects, but such as are derived from the future wages of their labour, or from the grateful returns of bodily repose and sleep. They become, like machines, actuated by a regular weight, and performing certain movements with great celerity and exactness, but of small compass, and unfitted for any other use.” *Ibid.*, pp. 145-146.

12) スミスが分析対象とした商業社会を資本主義社会というより、農業資本主義として理解する解釈が、最近は有力である。さしあたり Caton [1985], McNally [1988]。ヒュームについて同じことを主張しているのが、マクファーレンである。Macfarlane [2001]。

の進歩を基本的に支持しながらも、所有の欲望の歯止めなき拡大を徳にとっての脅威と見た。

“Affection for property! Janus double-fac'd, productive of many blessings, but degenerating often to be a curse. In thy right hand, Industry, a cornucopia of plenty: in thy left, Avarice, a Pandora's box of deadly poison.”¹³⁾ 「財産への愛よ。ヤヌスの双頭。多くの祝福をもたらすが、しかし墮落してしばしば呪いとなる。汝の右手には勤労、豊穡の角、汝の左手には貪欲、致命的な毒をもったパンドラの箱。」

したがって、ケイムズはスコットランドが、また大ブリテンが過度に富裕になることを認めなかった。ほどほどの富が中庸の徳と両立できるというのが、ケイムズの結論である。

ヒュームもまた欲望に溺れて、義務を果さないことを悪徳として否定した¹⁴⁾。けれども、ヒュームは、奢侈自体は大胆に肯定した。奢侈は人間の墮落をもたらすという通説をヒュームは退けた。大多数の著者とちがって、ヒュームは奢侈の大衆化を擁護した。この点では、ヒュームが、ハチスンとケイムズのプロテスタントの奢侈抑制論を退け、マンデヴィルの奢侈肯定論を継承していることは明らかであろう。奢侈はマンデヴィルにおいても、有効需要というその経済的役割にもかかわらず、依然として悪徳とされていた。ヒュームは奢侈を悪徳とは考えず、奢侈自体の意味転換を主張し、それをむしろ人間性に結びつけた。奢侈とは技芸の洗練に他ならない。過度の洗練は悪ではないかという議論は、ヒュームにはない。

こうして、奢侈＝技芸の洗練こそ、文明社会の発展の牽引車であるというのが、ヒュームの分析となった。ヒュームは従って、供給サイドだけでなく、需

13) Kames [1774] vol. 1. p. 67.

14) 「欲望の充足は、それがいかに官能的なものであろうと、それじたいを不道徳と見なすことはできない。およそ欲望の充足は、それがあつた人の支出のすべてを占めてしまい、その人の地位や財産のゆゑに世間から求められるような義務の行為や寛大な行為をおこなう能力を失わせる場合にだけ、不道徳なのである。」 Hume [1994] p. 113. 田中敏弘訳、29ページ。

要サイドも十分に把握していたとすることができるであろう。

ヒュームの経済分析は、快適に暮したいという欲望を追求する人間の行動に媒介された、ダイナミックな変動論という特徴をもっている。ヒュームにおいて、より大きな快の満足を求める個々の人間の欲望に発する行動（偶因）が、自然と社会という環境に働きかけ、それらの変化をもたらし、その変化を通して、人間と社会の発展が、意図どおりではないけれども、漸次実現されていくという歴史変動、言い換えれば進歩の歴史が経済分析のフレームワークに成った。それは政治分析のフレームワークともなる。それは社会と歴史に貫かれる人為を越えた自然的法則性を探ろうとする推測的歴史の方法の産物である。偶因（個別）を取り込みつつ必然（普遍）を媒介するダイナミックな変動が自生的なメカニズムとして発生するというこの動態的な分析は、全体としてはヒュームの理論を一歩押し進めたとされるステュアートの経済分析を越えている一面を持っている。すなわち、為政者の介入によって新段階を開かない限り停滞してしまうステュアートの機械的で硬直的な経済体制論を乗り越えているという一面である。

V 商業的ヒューマニズム

商業のポジティブな側面に気づくとともに、労働の快活さという発見をしたヒュームに必要なことは、労働の消極面を指摘することでも、商業のネガティブな側面を強調することでもなかった。その意味ではヒュームは社会の客観的な分析者にとどまらず、デフォーやマンデヴィルのような、商業社会のイデオログであったと言うべきかも知れない。しかし、デフォーを越えて、またマンデヴィルとは違って、ヒュームは商業を自由、正義、幸福、人間性に結びつけた。ヒュームにとっては、商業は人びとを有徳にさえるものであった。

したがって、洗練の思想家ヒュームは、むしろポーコックの用語を用いて、「商業的ヒューマニズム a commercial humanism」¹⁵⁾の思想家と規定すべきか

15) Pocock [1985], p. 194. 田中秀夫訳、373ページ。

もしれない。商業をささえるのは中下層階級の勤労であり、労働である。とすれば労働に快を見いだすヒューマニズムはいっそう商業的ヒューマニズムと呼ぶにふさわしい。あえて大胆な推測を交えるなら、この商業的ヒューマニズムはルネサンス以来のシヴィック・ヒューマニズムと自然法思想が高賃金の経済論¹⁶⁾を摂取して生み出したものであり、その根拠を商業が最も発展していた大ブリテン社会自体に求めていた。コーツが指摘するように、ヒュームには明確な高賃金論の定式は見られないものの、強制ではなく奨励に期待するヒュームが低賃金を支持していたはずはない¹⁷⁾。

快適に暮らしたいという欲望は、ホッブズがすでに見いだしていた欲望である。ホッブズの場合は主権者＝国家権力によって支えられないかぎり、快適な暮らしは望めなかったが、ヒュームは商業の普及の恩恵によって、下層階級も独立して暮せる条件を見ていた。したがって、ヒュームにおいてプロテスタントの禁欲倫理の弛緩あるいは克服、そして商業ヒューマニズムの確立を主張することができるであろう。商業社会の商工業者、労働者は利己心と欲望に従って、法＝正義を守り、自立して生活を営むことができる存在であった。カトリックの狂信もプロテスタントの熱狂もヒュームは相対化することができる地盤に立っていた。

下層階級の独立を可能にする社会分析こそ、ヒュームとスミス、さらにはミラーの経済論を価値のあるものとしている分析であり、視点である。スミスにおいては、文明社会は地主、資本家、賃労働者の階級分化が浸透した社会として構造化されているけれども、ヒュームの文明社会は階級分化がまださほど深化しておらず、ジェントリが社会の中心主体を成すことが説かれているものの、スミスの「商業社会」の描写に似た、なお独立生産者社会の面影をもった社会把握が見られるように思われる。ここでは各人は基本的に自らの欲望＝欲求の

16) 小林 [1976] によれば、高賃金の経済論は、Defoe—Vanderlint—Hume—Harris—Smith へと展開される Humanitarianism の経済思想を貫くものである。

17) Coats [1958] p. 39.

主体として登場し、商業＝インダストリに關与するブルジョア的個人なのである。したがって、ヒュームの労働＝快活説は、いささかユートピア的でもあり¹⁸⁾、イデオロギー的でもあるが、産業革命以前の独立生産者社会モデルの反映として、正当な根拠を持っているように推察される。

このような労働観を持ちえたヒュームにおいて、商業的ヒューマニズムはオプティミズムの頂点を極める。しかし、頂点を極めたオプティミズムはペシミズムへと反転するであろう。ヒュームは富国－貧国論争に関して、後者の前者への追いつき理論、収斂理論を説いた。しかし、そのことから直ちに労働者の安楽＝高賃金は長期には保証されないという帰結になるわけではない。ヒュームがタッカーの反論に譲歩し、先進国の優位の持続を受け入れたとすれば、先進国における労働者の高賃金はいっそう持続しうることになるだろう¹⁹⁾。ヒュームに文明への根源的なペシミズムがあるとすれば、それは商業文明がやがて頂点を極めたとき、そこから衰退が始まるであろうという予測においてである。この不安はスミスをも捉えた。

That when the arts and sciences come to perfection in any state, from that moment they naturally, or rather necessarily decline, and seldom or never revive in that nation, where they formerly flourished. (Hume [1994], p. 75) 「芸術と学問がいずれかの国家で完成するとき、その瞬間からそれらは自然に、あるいはむしろ必然的に衰退し、それらが以前に栄えた国民においては、ほとんど、あるいはまったく、復活することがない。」

さらにヒュームはそのような歴史認識にもまして、差し迫った眼前の危機を、商業文明の病理としての公信用制度の肥大化、公債累積にみた。この近代の発明はイングランドと大ブリテンの自由を守るための勢力均衡政策が要請した数多くの対外戦争の、戦費調達を容易にする画期的な手段であったが、しかし危

18) トマス・モアの『ユートピア』においては快適な生活が肯定され、労働は6時間とされているが、労働自体が快適とはされていない。

19) Cf. Marshall [1998] pp. 312-315.

険な道具であった。それを安全に使いこなす叡智をもちうるかどうかをヒュームは重要な問題と考えた。ヒュームは大ブリテンの帝国への野望を戒め、アメリカ植民地の独立を容認したが、しかし、公債問題については楽観的ではなかった。

ヒュームの労働＝快樂説も商業＝自由論も、大ブリテン文明社会の直面している眼前の危機を直接克服する処方箋とはならなかった。それはそもそも危機を克服する短期の戦略になるはずがなかった。その戦略は政治によって政策的に構築する必要があった。それは困難な課題であった。立法者、為政者はホップズとも、ロックとも異なる課題を与えられた。財政再建、国家再構築という課題である。ヒュームが「理想の共和国案」を描いたのは、大ブリテンにとっての山積する課題を解決する方向——長期の指針——を明確にするためであったと思われる。ヒュームは具体的な処方箋を提出するまでには至らなかったが、ヒントは示していた。それは社会と国家を論じる思想家の責任であったと思われる。しかし、そうした危機と歴史を貫いて、ヒュームが先駆的に析出した快としての労働は、経済的自由とともに、歴史を貫いてその能力を示してきたし、したがってその思想は長期的な妥当性を持った思想として今なお評価に値するであろう。

【付記】 本稿は科学研究費・基盤研究(A)(1)平成16-18年度による成果である。

参考文献

- Arendt, H. [1958] *The Human Condition*. University of Chicago Press.
Berry, C. [1994] *The Idea of Luxury*. Cambridge University Press.
Brewer, A. [1998] "Luxury and Economic Development: David Hume and Adam Smith," *Scottish Journal of Political Economy*, Vol. 45, No. 1.
Buckle, S. [1991] *Natural Law and the Theory of Property: Grotius to Hume*. Oxford, Clarendon Press.
Caton, H. [1985] "The Preindustrial Economics of Adam Smith," *The Journal of Economic History*. Vol. 45, No. 4.

- Coats, A. W. [1958] "Changing Attitudes to Labour in the Mid-Eighteenth Century," *The Economic History Review*, New Series, Vol. 11, No. 1.
- Forbes, D. [1975] *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge University Press.
- Haakonssen, K. [1981] *The Science of Legislator*, Cambridge University Press.
- [1996] *Natural Law and Moral Philosophy*, Cambridge University Press.
- Hume, D. [1994] *Political Essays*, Cambridge University Press. (田中敏弘訳『政治経済論集』御茶の水書房, 1983年。)
- Kames, Lord [1774] *Sketches of the History of Man*, 2 vols.
- 小林昇 [1976] 『経済学史著作集 イギリス重商主義研究 (1)』第3巻, 未来社。
- Macfarlane, A. [2001] "David Hume and the Political Economy of Agrarian Civilization," *History of European Ideas*, Vol. 27.
- Marshall, M. G. [1998] "Scottish Economic Thought and the High Wage Economy: Hume, Smith and McCulloch on Wages and Work Motivation," *Scottish Journal of Political Economy*, Vol. 45, No. 3.
- McNally, D. [1988] *Political Economy and the Rise of Capitalism*, University of California Press.
- Millar, J. [1803] *An Historical View of the English Government*, 4 vols., London.
- Neale [1975] "The Standard of Living, 1780-1844: A Regional and Class Study" in *The Standard of Living in Britain in the Industrial Revolution*, ed. by Arthur J. Taylor, London, Methuen.
- Pocock, J. G. A. [1975] *The Machiavellian Moment*, Princeton University Press.
- [1985] *Virtue, Commerce and History*, Cambridge University Press. (田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房, 1993年。)
- Rotwein, E. [1955] Hume, *Writings on Economics*, edited and introduced by Eugene Rotwein, Edinburgh, Nelson.
- 坂本達哉 [1995] 『ヒュームの文明社会』創文社。
- Smith, A. [1976] *Wealth of Nations*, Glasgow edition. (水田洋訳『国富論』(1)-(4), 岩波文庫, 2000-2002年。)
- 田中敏弘 [1971] 『社会科学者としてのヒューム』未来社。
- Wennerlind, C. [2001] "The Link between David Hume's *Treatise of Human Nature* and his Fiduciary Theory of Money." *History of Political Economy*, 33-1.
- West, E. G. [1996] *Adam Smith into the Twenty-First Century*, Edward Elgar.